



ほっかいどう
生涯学習
Lifelong Learning

ホームページアドレス <http://www.hsgk.jp>

新しい自分との

出会いや発見がきっとある



目次

●年頭のご挨拶……………	2	●私の生涯学習……………	5
●これからの生涯学習を展望して……………	3	●平成29年度賛助会員のつどい……………	5
●わがまちの生涯学習……………	4	●随想40……………	6



年頭のご挨拶

公益財団法人 北海道生涯学習協会

会長 宇田川 洋

新年明けましておめでとうございます。戌年の輝かしい新春をお迎えし、皆様のご多幸を謹んでお祈り申し上げます。

当協会における公益目的事業に位置づけ実施している生涯学習事業は、皆様の深いご理解とご支援をいただき大きな成果を上げておりますことに対しまして、心よりお礼申し上げます。

北海道らしい生涯学習社会の実現のために、「だれもが、いつでも、どこでも」生涯にわたって学習を継続できるように①豊かな人生をおくる学習機会の提供、②技能のスキルアップを図る学習機会の提供、③地域や人づくりのための人材の発掘や育成を図る学習機会の提供、④生涯学習への情報提供と相談の四本の柱を立て、「生きがいつくり生涯学習促進事業」や「学習成果実践事業」、道民の学習ニーズや今日的課題に焦点を当てた「かでの講座事業」等を、札幌会場をはじめ全道各地において市町村等のご支援をいただき多くの方々の参加を得て開催しております。

当協会が、北海道教育委員会より受託している道民カレッジ事業は、主催事業に道民カレッジ生が行っている地域活動の交流をとおして、道民カレッジ生の地域活動へのより一層の参画を促すことを目的とした「地域活動実践講座」や地域で活動する際に必要な知識や技術に関する内容をインターネットで紹介する「地域活動インターネット講座」が新たに加えられました。また、地域の様々な機関や住民と連携し、地域活動やまちづくりに貢献する人材を育成するための、参画型講座である「地方創生塾」をオホーツク管内美幌町、根室管内「羅臼町」で実施しております。さらに4年目を迎える「ほっかいどう学」大学インターネット講座は道内6大学のご協力をいただきながら制作し、インターネットによる動画の配信とDVDを高等学校へ配布するとともに、レポート作成に向けた学習会の開催などにも努めております。

また、道民カレッジ事業に賛同する市町村、大学、団体等が実施する講座・セミナーを体系化した「連携講座」は、「地域活動コース」を加え3学科7つの専門コースに分類され、多くの道民の方々が道内のいろいろな場所で自分が学びたい講座を選び、自己の向上に向けて学んでおります。今年度は既に5,300講座を超え一層充実した連携講座となり、着実に生涯学習の学びが広がっていると思っています。

また、当協会では、生涯学習社会の実現に向けた実践において、功績のある個人・団体を表彰し、その功績に報い、もって道民の生涯学習の振興に寄与することを目的に「生涯学習実践者奨励表彰」を設けており今年度は4個人を表彰したところであります。

公益財団法人北海道生涯学習協会といたしましては、今後とも道民一人一人の生涯を通じた自発的な学習活動を支援し、北海道らしい生涯学習社会の充実・発展に全力で取り組んで参りますので、皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

皆様の益々のご健勝とご発展をご祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

【平成29年度生涯学習実践者奨励表彰】

※敬称略（五十音順）

（個人）

- ・佐藤 一雄（江別市）
- ・中野 和子（函館市）
- ・田上 唯勝（旭川市）
- ・宮本 高市（帯広市）

「これからの生涯学習を展望して」

ほっかいどう学を学ぶ会

会長 河地 良一

歴史から何を学ぶか ～北海道の独自性を考える～

1 歴史を学ぶ視点

道民の一人として、北海道の歴史をどのように学んでいったらよいのか。

中国の思想家である孔子の「論語」の中に「温故知新」という名言がある。これを我が国では「故（ふるき）を温（ぬく）めて（＝訪ねて）新しきを知る」と訳し、長く語り伝えてきた。

その意図から、「歴史は単に過去の出来事を知ることではなく、過去の歴史の教訓から、現代を生きる人間として、これからの社会をどのように生きていったらよいかを学ぶ」指針（知恵）として理解したい。

2 歴史をどう捉えるか

そこで、過去の歴史の情報として遺物、遺跡、伝承、記録などがあるが、その中でも記録はだれがどのような意図で記録したかによって、その捉え方は大きく異なる。ほとんどは、勝者が己の治世を正当化するために残した記録が歴史となっていく場合が多い。また、己に有利な歴史に塗り変えることも可能である。

例えば、日清・日露戦争、日中戦争なども、日本、中国、韓国それぞれの立場によって、歴史認識は大きく異なる。また、歴史は、「だれがこの国や地域を統治していたか」ではなく、「その時代を生きていた庶民（人たちが）、どのような暮らしをしていたのか」という複眼で捉えると、「歴史の主役はだれか」という認識は変わる。

3 歴史の中での北海道

日本の歴史は、弥生時代の終わりに「魏志倭人伝」

で登場し、古墳時代、飛鳥時代に朝鮮半島からの渡来人が新しい文化を伝え、大王から天皇を中心とする国家に変身し、それ以降は「大和は国のまほろば」が日本の国家観となった。しかし、蝦夷と呼ばれた北海道や東北の歴史は、日本の歴史の中ではまったく蚊帳の外で、外地として扱われていた。しかし、私たちの住んでいる北海道・蝦夷地には、日本列島が大陸と陸続きであった旧石器時代の遺物や遺跡も存在する。

1975年（昭和50）に旧南茅部町で発掘された中空土偶（国宝に指定）は、3500年前の出土品である。

蝦夷地には弥生時代はなく、続縄文・擦文と続き、海洋狩猟民族のオホーツク人、その後のアイヌの人たちがこの北の大地に住んでいた。江戸時代になって、松前藩が場所請負人に沿岸の漁場を任せため、アイヌの人たちを使役として酷使した。幕末に蝦夷地を6回も探検した松浦武四郎は、その窮状を幕府・開拓使（明治新政府）に訴えたが、徒労に終わった。

4 北海道の独自性を考える

1869年（明治2）に、蝦夷地が北海道と名付けられた。北海道の開拓は、開拓使、その後の北海道庁、戦後は北海道開発庁によってすすめられた。そのためか、陳情による中央への依存体質が抜けないのも北海道人だ。

今、まさに東京一極集中が、日本の政治、経済を際立たせている。その反動で、日本中から地域の文化を育ててきた田舎が、消えようとしている。

北海道の歴史を学ぶということは、①北海道の独自性に気付き、②北海道らしさを創造する、道民の生涯学習であると考えのだが、いかがでしょうか。

わがまちの生涯学習

浦河町教育委員会

教育長 浅野 浩 嗣

浦河町は、日高山脈を背に太平洋に面した人口1万3千人弱、面積694km²の町で、振興局があり、古くから日高地方の行政の中心として栄えてきました。国や道などの出先機関があり通勤族も多く、牧場で働く外国人など、田舎にしては住民の出入りが多く、多様な人たちが暮らす町です。

町の産業は、水産業と農業が中心で、特に農業は競走馬の生産・育成が大部分を占め、これまでにシンザンやテイムオペラオーなど数々の名馬を世に送り出してきました。

このような浦河ですが、平成10年3月に「生涯学習の町宣言」を議会議決し、来年で20年を迎えます。

この間、生涯学習の推進体制整備や普及啓発、学習機会の充実など様々な事業に取り組んできましたが、当時は振り返りながら、今に続く当町の生涯学習について紹介します。

■生涯学習の町宣言の意義

自治体が行う様々な宣言はその決意を内外に表明するものです。

当町が生涯学習の町宣言をした理由の1つは、すでに様々な学習活動が活発に行われ、平成8年には町民の学習活動の拠点である総合文化会館のオープンや図書館のリニューアルなど施設も充実し、宣言にふさわしい学習環境が醸成されていたことがあります。

もう1つは、「生涯学習」を教育行政だけでなく町政推進の柱の一つに据え、表舞台に出し総合的に進めるためです。

■道民カレッジと一体化した「うらかわカレッジ」の開設

宣言後の数年間は、イベントやパンフレットの全戸配布など、「生涯学習や宣言内容」の普及・啓発活動に力を入れましたが、この20年の間に社会全体に生涯学習が定着してきたこともあり、現在は当初からの「生涯学習推進月間」を続けている程度です。

また、町民の多様な学習機会提供のため、平成13年から道教委が始めた「道民カレッジ」の登録促進と連携講座の拡大を進めるとともに、平成17年に町内で行われる学習機会を「うらかわカレッジ」として位置づけ、講座受講ごとに単位を認定し記録する手帳の交付を開始し、道民カレッジの手帳と併用し運用しています。

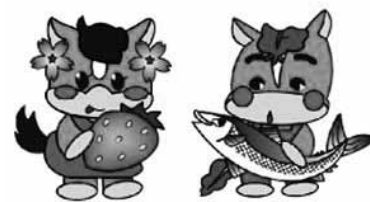


■生涯学習のデパート「浦河高等学校開放講座」、役場職員が講師の「出前講座」

町内唯一の高校である浦河高等学校の学校開放講座は、平成8年に始まり20年以上にわたり学校と教育委員会が協働で取り組み、多い年には20を超える講座に300人以上の町民が参加したこともあり、今年は14講座が行われました。

当町のキャラクター「うららん、かわたん」は浦河高校生のデザインによるもので、平成28年3月に当町は同校と連携協定を結び、さらに協力関係を強化しました。

また、今では多くの市町村が行う「まちづくり出前講座」は平成10年から始め、ごみの分別や介護保険制度など、その時々行政課題も出前メニューに入れながら実施しています。この実践から生涯学習は教育行政だけのものではないという職員の認識も生まれてきたと思います。



■馬の町らしい施設「乗馬公園」

平成元年の国体馬場馬術競技大会の跡地に、乗馬普及の拠点として乗馬公園を整備し、幼児から高齢者まで多くの町民が乗馬に親しみ、特に通勤族からの人気は高く、転出後も遠方から浦河に夫婦で通う人もいます。

また、以前から関係団体と連携しながら、障がい者乗馬にも取り組んできました。

■おわりに

生涯学習の町宣言から20年。これからも、町民の学習ニーズへの対応とともに、小中学校のコミュニティ・スクール化による地域と学校の新たな連携・協働から生まれる子どもと大人の学びを通して、個性豊かで活力ある生涯学習のまちづくりを進めたいと考えています。

私の生涯学習

一般財団法人 北海道文化財保護協会

理事 松本 昇

私の桶狭間

リタイアして数年経つ。酒、ゴルフ、麻雀の会社人間から自由人になったとき、何をしようか迷った人の話を耳にした。反面、家庭菜園や旅行、サークル活動やジム通いに励む人も少なくない。

私の場合、映画、音楽、読書など趣味を通じた知己を持っていた。退職後、このネットワークへ積極的にコンタクトを入れる。時間のあることでよもやまの話に興じ、お互いが触発された。生地は城下町で、物心ついた頃から歴史や文化に親しんできた。知人に北海道文化財保護協会の講演会へ誘いを受ける。北海道の文化を識る機会になると探求心が湧いた。会員になり、青森や秋田、福島など道外の文化財巡りに参加し、多くの方と交流の輪ができる。

一昨年は、保存・復原された東京駅丸の内駅舎や大友亀太郎の生地を訪ねるプランを耳にした。東京で勤務していた時に江戸の史跡を訪ね歩き、小学校が小田原城二の丸址に建っていたこともあり企画に参加させて貰う。これが切っ掛けとなり、9階まなびの広場での展示や文化トークショーなど催事にも携わり、一般財団法人でリスタートの際は、理事として事業や編集委員での参画を任じられた。



札幌は家人の出身地にあたり、終の棲家を持ったことで「道内生れ・・・？」と訊かれるが、故郷は神奈川県小田原市になる。なぜ県名から・・・単に小田原だとたいがい「静岡県ですね」と言われてしまう。伊豆や駿河や遠江でもなく昔から相模国であり、最近は大友亀太郎と同郷になると答えている。

帯広勤務の頃に知り合ったヒューマンリンクスの富田友夫編集長に「リタイア後の見聞録を綴ってみては」と情報誌プラス・ワンへの執筆を勧められた。月一回のエッセイは、掲載されると雑誌社のWebサイトでもアップされ、バックナンバーも5年分載っている。豊平のFMアップル、毎週土曜午後のラジオ番組パーソナリティーで、旧知の元HTBアナウンサー長谷川宏和氏から「映画や旅の話をしませんか」と声が掛かり、毎月スタジオに通う。旅先だと電話での中継レポートになった。コミュニティ放送局だが、パソコンでインターネット放送へアクセスすれば、どこからでも聴ける。

別の自分になってみたいとの変身願望で、ペンネームは《たかやまじゅん》を使っている。こうして「観る、聴く、読む、蒐める」に「書く、喋る」が加わった。これを認めて？くれる家族がある。オーバーホールすれば、身体も頭も動くようだ。営業畑に身を置いたことで、デスクワークよりフットワークのスタンスは変わっていない。

永禄3年(1560)5月19日朝まだき、清州城を後に熱田神宮で終結した織田信長は、鳴海街道をひた走る。世に言う「桶狭間の戦い」で、もし信長が籠城策を採っていたとしたならば・・・。

人それぞれ辿り着く先が同じとすれば、打って出るか否か。少しの好奇心とラインを持つことで、残りの時間が広がるのではなかろうか。

平成29年度「賛助会員のつどい」を開催しました！！

(公財)北海道生涯学習協会では、11月29日(水)に北海道立近代美術館において「賛助会員のつどい」を開催しました。

当日は天候にも恵まれ賛助会員36名の参加があり、はじめに「追悼特別展 高倉健」について美術館の主任学芸員から説明を受け、その後、自由に観覧したりお楽しみ会などを行い会員相互の研修と親睦を深めました。

随想40

気になるささいな事

テレビを見ていて気になるささいな事がある。変な話ではあるが、それは刑事ものなどに出てくる白骨死体の事である。人類学を少々かじった人間としてはいささか気になる事、それは人骨の歯の噛み合わせである。咬合（こうごう）と言うが、現代人の咬合は、上の前歯が下の前歯の前に出る鉗状咬合が普通であるが、縄文人などに見られる受け口とも言われる鉗子状咬合の人骨がテレビの現代サスペンスで見られる。何故か大半がそうである。上下の前歯がピタリと合っている咬合で、縄文人を連想してしまうのは私だけではあるまいと思う。そのことが非常に気になるささいな事なのである。なまじ変な知識があると気になって仕方がない。

日本の江戸時代などの時代劇に登場する蠟燭（ろうそく）も気になるものである。もちろん全部ではないが、長屋暮らしの町民の家で蠟燭はあり得ない光景かと思われる。本来の蠟燭は、平安時代に中国からの輸入品であったとされる蜜蠟燭と考えられているが、交通が途絶えて「松脂（まつやに）ろうそく」が製造され、室町時代になって「木ろうそく」に変化したらしい。ウルシやハゼノキなどウルシ科の木の実を突いて蒸して、

搾って取った固体脂肪を原料として、それを灯心に塗って作ったとされている。しかしこれとても一般庶民までには行き届かなかったと言われる。地方の農・山・漁村まで蠟燭が行き渡ったのは明治になってパラフィンなどを原料とした「西洋ろうそく」の製造が行われてからとされている。このように江戸時代の武士の家でも蠟燭を使用できたのはごく一部であったらしい。

そこで室内照明に使われたのが油である。主に動物の油を利用していただけと思われるが、それには受け皿としての容器が必要になる。燈明皿と言われるもので、素焼きのものと陶製のものがある。素焼きのものは「かわらけ（土器）」と呼ばれており、他に秉燭（ひょうそく）や瓦燈（がとう）などがある。「かわらけ」は、酒などを飲む時にも使われた飲食用と燈明皿として使用された場合があるが、中世から近世にかけていろいろな遺跡から大量に出土している。お馴染みの「かわらけ投げ」は、厄除けや開運などの願掛けで高いところから素焼きや日干しの土器の酒杯や皿を投げる遊びから始まったと言われる。テレビでかわらけが登場する時代物を見ると少し安心する。

気になる事やものから話が進んだが、気にしない事。これも随想ならではの良さと考えよう。

（公財）北海道生涯学習協会

会長 宇田川 洋

本年もご寄付いただき ありがとうございます

平成29年10月31日（一社）札幌ゴルフ倶楽部様から、社会教育事業に対する助成として、ご寄付をいただきました。これまで長年に渡るご寄付に敬意を込め、11月1日に当協会から感謝状をお渡しいたしました。

●表紙写真提供 三原和廣氏

編集後記

新年あけましておめでとうございます。昨年は、九州豪雨やじゃがいも危機などの自然災害で話題の多い年でしたが、藤井聡太棋士の連勝記録や羽生善治棋聖の「永世七冠」、桐生祥秀選手の陸上100m日本初9秒台など、挑戦者の活躍が注目を集めた年でもありました。今年も平昌オリンピックやサッカーワールドカップ

新入会員紹介（敬称略）

次の方が新たに賛助会員になりました。今後ともよろしくお願いいたします。

【団体】

（株）北海道教育互助センター

【個人】

宇美 敏広	石川 忠博	松本 邦由
野崎 弘幸	柏谷 佑	高杉 直人
本間 雅章	久田 利憲	金田 英雄
村上 由佳	馬橋 功	梶浦 仁
濱中 昌志	丸尾 清一	原 光宏
中島 康則		

※賛助会員（個人 一口3,000円、団体 一口10,000円）を募集しております。詳しくは事務局までご連絡ください。

ロシア大会もあり、また挑戦する日本選手達の活躍を期待したいものです。

当協会では今年も、各種事業を推進し、多くの道民の皆様の学習活動を支援できるように、職員一同努めてまいりますので、皆様のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。